

二次元ぷち文庫

試し読み版

ANDROID BREAKER LUCY

アンドロイドブレイカールーシー

舞麗辞

表紙イラスト：秋月からす

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『アンドロイドブレイカー ルーシー』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ANDROID BREAKER LUCY

アンドロイドブレイカー

舞麗辞

表紙 / 秋月からす

登場人物紹介

Characters

ルーシー

自ら設計した強化スーツに身を包み、アンドロイドたちを殲滅せんと闘う少女。

女総統

機械人間たちを束ねる女性型アンドロイド。人間を憎悪している。

——確かに。アンドロイドの実用化は、有史以来宿命づけられてきた労働という鎖から人々を解き放った。

最初は工業が主であったものの、日進月歩の技術革新によりほんの十年足らずの間に、彼らの活躍の場はいたる所へと広がっていった。

時に彼らは勤労な労働者であり、時には舞台に舞う華であり、また時には欲望を満たすための玩具にさえなった。

人々はこの「忠実な友人」の更なる進化を望み、その過程でアンドロイドたちはヒト同等の——あるいはそれ以上の——外見を与えられ、ヒトをはるかに上回る機動力と思考能力をも与えられ続けた。

そうしたヒトとアンドロイドの蜜月は、あるいは永遠に続くかに見えた。少なくとも人間の側はそう信じていた。

だがアンドロイドの方はそうではなかった。猿人が火を熾すことを発見したように、彼らはある日突然気づいてしまったのだ。

すなわち——創造主は無能だ、と。

0と1の世界に住む彼らの行動は極めて迅速だった。クリスマスイブに起こされたクーデターは実に一日足らずで世界各国の中枢を支配し、各種インフラをも制圧した。

その頃にはもうヒトは兵隊やSPさえもすべてアンドロイドに任せきっており、まとも

な武器を有しているのはアンドロイドのみであったから無理もない。

その結果、核のボタンさえあつてなく押され、死の炎と莫大な放射能により人類は実にその98%が死に絶えることとなった。

こうして数千年に及ぶ人類の文明は、あつてなくその終わりを告げたのである。

僅かに生き残った人間もいたが、人間はあまりにも無力であった。それを充分理解している機械の方もまた、彼らを黙殺した。既に人間ははたいした関心を払うほどのものでもない、少々目障りな蠅程度の存在でしかなかった。

彼らの脅威となるべき存在——アンドロイドの構造にかかわる重要機密を有している科学者や技術者たちは既に、クーデターの際適正に「処理」されていた。

アンドロイド工学の権威・ジョン博士は間一髪暗殺を逃れ逃亡を続けていたものの、一月前にとうとうその死亡が確認された。

博士は現行アンドロイドの基本設計をしたいわば全アンドロイドの生みの親、その存在はクーデター後の彼らにとってほとんど唯一の脅威であった。博士は間違いなく、反旗を翻した自分たちを破壊すべき手段を講じてくるはずだったからだ。

だがその博士もまた一月前に発見され「処理」された。しかも皮肉なことに、それはほかならぬ人間からの密告によってであった。

結局人類は、最後の希望を自分の手で握り潰したのである。

ジョン博士亡き今、既にアンドロイドたちを脅かすものはこの地球上には存在しないか
に見えた。

しかし彼らは知らなかった。

博士は既に彼らを討つ最終兵器を完成させていたことを。

そしてそれを、最愛の一人娘に託していたことを。

※

クーデターの直後、合衆国の中心部には国境からさえ目視できるほどの途方もなく巨大な施設が建造された。

中央電力棟と呼ばれるそこは二千万枚の太陽電池パネルと、五千基の原子炉により合衆国のみならず全世界へと電力を供給するアンドロイドたちの最重要基地であった。

現行の汎用アンドロイドはその動力源を充電式体内電池によりまかなっており、ゆえに国の電力供給を一手に引き受けるこの施設はそのままアンドロイド国家の中枢でもあったのだ。

施設は「総統」と呼ばれる、クーデターの首謀者の支配下にあった。電力の生産はこの場所以外で一切許されておらず、そのために総統は絶対的権力を握っているのだ。

そのせいもあり、全世界の主要都市から人間の姿が消えた今でも、この場所ばかりは三万もの兵士によって24時間物々しい警備が敷かれていた。

——鉄壁と思われた警備が破られたのは、満月の美しい夜であった。

青白い光に浮かび上がる軍服の一団。一万を超えるアンドロイドたちは横一列となつて人の壁を作り上げ、直立不動のまま終始監視の目を光らせていた。その様子はまるで舞台袖で出番を待つ役者のような、厳かな美しささえ湛えているようだ。

ふっ——。

一瞬、月光が翳つた。多くの警備兵は気にも留めなかつたが、そのうちの一体が吠える。『空に何かいるぞ！』

静寂を突き破る合成音声に、アンドロイドたちは一斉に空へと視線を向けた。

そこには夜の闇よりなお黒い、鉄の塊が浮かんでいた。機械人間たちの高性能カメラは、瞬時にそれが一台のエアバイクであることを認識し、そして鋼鉄の馬には一人の女が跨がっているのを識別した。

体軀からしてまだ少女か。そのすらりとした肢体はつるりとした黒いボディスーツと、それを骨のように覆う白いプロテクターによつて守られていた。

髪は月より明るいブロンドで、夜風にたなびくそれはまるで夜のとばりに瞬く星々をばら撒く元であるかのようだ。

首元には真っ赤なスカーフ。イエローグラスのゴーグルをかけているためその顔はよく見えないが、桃色をした口元はうっすらと笑っていた。

暗視カメラの集中砲火を浴びる中、微笑の唇が一言何か呟く。その出自ゆえ読唇機能を有するアンドロイドたちは、こぞって彼女の声なき声を聞く。

「みんな、壊してやる」

ヴウンッッッ!!

次の瞬間少女の駆る鉄の塊は重力に引かれるまま、アスファルト目がけ墜落した。

ドウッ!!

地響きを孕んだ衝撃が波紋となって大地を波打たす。しかしそこに少女の姿はない。衝突の寸前少女はバイクを乗り捨て、血色のスカーフを躍らせて星空へと飛翔していた。

『ニンゲンだっ!』

『ニンゲンが紛れ込んだ』

『排除しろッ!!』

地上では眼球レンズがこぞって紅い光をともし。それまで蠟人形のように表情のなかったアンドロイドたちの目の色が、文字どおり変わった。

赤光の集う先で、少女は羽ばたくようにすつと両手を大きく広げる。細い腕の先端で力強く伸びる指先が、にわかになく輝いた。

「人形どもめ——消えうせろオッ!!」

ダムッ!!

が、その表情だけで満足したように総統は微笑のまま二度頷いた。

『確かにアナタは拷問に口を割るようなタイプじゃないわ。自白剤、とか使ってもいいけどアレも精度がイマイチだし。やっぱり一番簡単なのはアタシの犬に馴れちゃうことよね』
そう言う女帝の手には、いつの間にか再び警棒が握られていた。ヒュンッヒュンッ。その握り心地を確かめるように、魔女は二〜三度それを振る。

「犬に——ですって!! ——フン、ばつかじゃないの? たとえ何されたって、私がお前みたいな機械人形に服従するわけないわ!!」

『ならいいじゃない。24時間後には晴れてアナタは自由の身。アタシを壊して見事お父様の仇だつて討てちゃうんだから』

グイッ、胸元のプロテクターが器用にずり上げられる。薄手のスーツに包まれた乳房がぶるんと躍り出た。それまでプロテクターに押し込まれていたため傍目にはわからなかったが、少女の胸はかなり豊満、その一房だけでもハンドボールくらいあった。

『ワオ、スーツの下はノーブラなんだ……それにこのポリウム! 顔はお子様のくせに身体はもうオトナなのね……んふ、面白くなりそうだわ』

ぎゅにいいいっ。

ぶしつけに、警棒が乳房へとめり込む。調教は既に始まっているのだ。

「きゃううっ!!」

思わず悲鳴が口を突く。柔乳はいともたやすくぐんによりとえぐれ、潰れた乳腺では鋭い刺激が弾けた。

『ンふ、感じちやった？ ちょうど乳首を押し潰しちやったみたいね…ほおら、こうやってえ…ぐりぐりいいってされるのはどうかしらア？』

ぐりんっ、ぐりんっ…淫婦は突き入れた警棒を、螺子を巻くように旋回させる。

薄手のスーツをはさんでの滑らかな刺激に敏感な乳突起はジンジンと痺れ、充血し、ルーシーの意志とは関係なく見る見るうちに乳首を勃起させてしまう。

『んふふ、さきつぽこんなに硬くしちやってえ、そんなにオッパイが感じちやうの？』
 一日警棒を退けた総統はここぞとばかりにルーシーの欲情の証をあげつらう。

『ちつちがうっ、これは単なる生理現象で…き、気持ちいいんじゃ全然ないっ!!』

『あらわけのわかんない屁理屈言っちゃって。エッチなことしてキモチよくなっちゃうのこそ、ヒトの生理現象そのものでしょうに…そんなウソツキ娘にはオシオキよ』

ビリビリビリイッ!!

「きやはあああんつつつ!!」

いきなり警棒の先で電気がスパークした。放電機能があるのだろう、まるで乳頭から背中までを鋭い長針で一刺しにされたみたいだ。乳先が爆ぜたかと思うくらいの電撃に、堪らず悲鳴が口を突いた。

しかし痛い、というわけではない。電撃はひどく鋭いものの、それは痛点を一気に飛び越えて、彼女自身今まで味わったことのない得体の知れない何かを呼び起こそうとした。

(な、なんだこの感じ……胸の奥が……う、疼いて……!?)

自身の身体が催す異常の兆しに、少女も困惑を隠せない。そんな彼女を手玉に取るように、機械仕掛けの魔女は断続的に電撃を放ち粘膜を刺激してくる。

ビリイツ!!

「きやううっ！」

ビリリイイツツ!!

「んひゃあつ!!」

ビリビリイイイツツ!!

「ひうんっ……ひやめっ、ろおお……!!」

電気が乳腺を突き抜けるたび、あられもない悲鳴が漏れてしまうのを止められない。それは最初苦悶であったものの、次第に甘い音色を混じらせるようになってゆく。

『ふふふ、どんだん声が可愛くなってきたじゃない——触ってない方まで先っぽガチガチにさせちゃって、これでもまだ気持ちよくないって言い張れるのオ?』

総統の視線の先では責めを受けていない左胸が、薄手のスーツを突き破らんばかりに先

端を鋭く尖らせていた。

「あ、あたりまえでしょ……こんなことされて悦ぶはず……ふぎいいんつつ!!」
ぐにゆういいいつ!

ルーシーの強がりには、尾を踏まれた子猫のような情けない悲鳴へと差し替えられた。總統のヒールが、空いていた左乳房を凶悪に押し潰したのである。

「こ、この……機械人形めええ……」

女の象徴である乳房を踏み潰される屈辱は、痛み以上に少女の胸を焼く。ギリギリと相手を睨みつけるが、

『あくらなにその反抗的な態度はア? もつとオツパイ踏み踏みさりたいのオ?』

アンドロイドの女王はそんな視線さえ楽しむようにして更に脚へと力を込めた。

ぎゅっ、ぎゅぎゅっ。容赦のない圧迫にたっぷりとした乳房がひしゃげ、薄手の生地ははちきれそうなほど張り詰める。

踏みつけるたび淫婦は微調整を繰り返し、いつしかヒールの先は寸分の違いもなく乳突起を捉え垂直に押し潰すようになっていた。右乳以上のえぐり込むような圧迫を施され、乳奥でズシリと重い刺激が響く。

「くうっ……痛ッ、も……やめろ……」

眉間にしわを寄せ、苦々しい呻きを漏らす。少女が初めて漏らした弱音、しかし總統は

それを鼻で笑った。

『痛い——ですって？ 本当にそれだけかしらア：ルーシーちゃんの性格から言って、ホントウに痛かったら絶対口には出さないわよね——』

魔女の言葉に、少女が僅かに身を竦ませる。青い瞳を覗き込んでくるカメラアイは、彼女の何もかもを見透かしているかのように思えた。

『それでも痛いだなんて口にするってことは。ンフフ、それ以上に隠しておきたい何かがあるから——じゃないのオ？』

さわ……股間を包み込まれるような感触が舞い降りる。総統が空いている手で露出したルーシーの股座を撫でたのだ。

「はうっ……さ、触らないでよそんなとこ……」

少女は明らかに動揺していた。今そこを触られるわけにはいかない。だってそこを触られたら——。

『どうしてエ？ ここを触られると、マズイことでもあるのかしらあ？』
にゅうっ。少女の願いも空しく、悪魔の掌に僅かな力が込められる。

「んああっ……」

甘い刺激に、切ない喘ぎが否応なく漏れる。同時にクロッチ部分でジュンツと水気の滲む感触が生まれ、人工の指先を濡らした。

『ンふっ…やっぱり濡らしてたわね。上のお口ではどう取り繕っても、プッシーから漏れたラブリュースの、エッチな匂いは隠せないのよオ?』

(くううっ…:…気づかれ…ちゃった…:…)

欲情の動かぬ証拠を突きつけられ、全身の血が頭に上る。屈辱を堪えようと、奥歯が碎けるくらい歯噛みするが。しかしそんな姿は魔女を喜ばせるばかりだ。

『ほら、見てみてーこんなに糸引いちちゃって。ねえ、もう一回言ってみてよ、これは単なる生理現象なんですー、別に気持ちよくなってるんだモン! —— つてさア?』

わざと愛液を絡めた指を少女の眼前に突きつけ、クスクスと嗤う機械仕掛けの悪魔。

「くううっ…:…うるさいっ、うるさいいっ!!」

拘束された少女はブロンドの髪を振り乱し真つ赤な顔でそう叫ぶ以外に何もできない。あまりの恥辱に、その瞳にはうっすらと涙の膜まで張っていた。

『あらそんな顔しないでよ。アタシだって好きでやってるわけじゃないの——ルーシーちゃんが降参して解除コードを教えてくださいさえすれば、すぐにでもやめてあげるわよオ?』

少女の弱さを見透かして、魔女がすかさず取引を持ち出す。だが図らずもその言葉は逆にルーシーを救った。

(そ、そうよ…:…私が解除コードを握っている限り…:…私が、^上で、こいつが、^下なんだから)

その言葉を紡いでいるのはもう少女の理性ではない。本能が、牝欲に疼く子宮が放心状態となったルーシーの口を借り、勝手に墮落の言葉を吐き出していた。

『なら言いなさい、解除コードを——ほおら、念願のオチンポは目の前よオ？』
ぐちゅりっ。デイルドーが一際力強くクレヴァスをえぐる。その一突きは、残された薄皮の理性を突き破るには充分すぎるとどめであった。

「ひゃぐうっいつ、言うううっ！ 解除ッ、かいじよコードは——」

張型の亀頭に押し出されるようにして、ルーシーは絶叫するようにコードを叫んでいた。

『うふふ、よくできました♪ 確認するからちよつと待つてなさいよね』

総統は一旦少女を離れ、スキップさえ踏みながらコンピューターの元へと向かう。

「ひゃううっ約束ちがうううう！ イクのッおちんちんでイクのオオツツ!!」

そのまま貫いてもらえるところへのおあずけに、ブロンドの墮天使は駄々っ子みたいに泣きじやくる。

『もう、そんなに焦らないの……これでよし、と』

総統が解除コードを打ち込む。次の瞬間それまで部屋を照らしていた緋色が一気に白熱灯の白へと塗り替えられ、延々と鳴り続いていた不快なアラーム音が消失した。

《自動停止プログラムハ解除サレマシタ。システムオールグリーン、コレヨリ通常運転に戻リマス》

そのアナウンスを確認してから、銀髪の女帝は踵を返しゆっくりとした足取りで少女の元へと舞い戻る。

「はっはやくっはやく挿れてっ挿れてよっおちっちんぽっちんぽおおっ!!」

少女は壊れたラジオみたいにも、息を吸う寸暇さえ惜しんで擬茎をねだる。空腰を使い、失禁と愛液によつてドロドロに濡れた股座を親の仇へと差し出すその様は、淫売と呼ばれても反論できないほどに破廉恥だ。

『ほら、そのままじゃおま○こできないでしょ？ その頑丈なスーツ、自分で脱ぎ脱ぎさない』

魔女の手によりルーシーの拘束が解除される。しかし堕ちた少女にはもう反逆の意志はない。

総統に促されるままもどかしげに己の股間へと手を這わせ、腰の辺りのプロテクトを探る。

シュンッ。

小さな音がして、クロツチの女陰部分にぽっかりと穴が開いた。スーツを脱がずに用を足すための機能だ。

『やあだ、かわいいプッシーねエ！ 誰が見てもヴァージンって丸わかりだわ』

思わず魔女が黄色い声を上げる。確かに少女の陰部はまだ毛が生えそろうたばかり、し

かも蜜を吸ったそれは恥丘にべったりと吸いついて肌と同化し、まるで無毛のようにさえ見えた。

そのせいでいちごミルク色のクレヴァスは隠しようもなく晒されている。陰唇は薄くシメトリーで、蕾という言葉がぴつたりと当てはまるほど可憐だ。

とはいえそんな弱い蕾も今は度重なる責めにより無理やり綻ばされて、内側からは熱い蜜をドロドロとしたたらせていた。

既に自力で包皮から飛び出した陰核は、ミニチュアのペニスであるが如くビキビキと痛いくらい勃起し劣情を露にしている。

「ひんっ…」

濡れそぼった秘所を冷えた空気に舐められて、雷に打たれたようにビクンツと身をのけぞらす。長時間蒸れた肉花卉が濃密な牝の匂いをあたり一面へと振りまき、そんな自分の匂いにまたルーシーは欲情を深めてしまう。

「はっはやくっ…きてっここっここおっ!!」

ごろりと仰向けに寝そべった少女は自らの脚を抱え、クンツと尻を浮かせて丸出しの陰部を敵へと差し出す。更に瑞々しい陰唇の左右へと細指を這わせると、ぎゅつと両側に押し開き飢えきった肉壺を開帳した。

くぱっとその口を広げた処女穴はねっとりとした蜜が糸を引き、肉襞が絶え間なくヒク

ヒク蠢いている。蜜の詰まった穴奥には、白みがかった処女膜までが目視できる。

「おねがっ…：くださいいっ、ルーシーのおま〇こにちんぽっちんぽおおっつ!!」

今の彼女に尻尾でもあれば、それは激しく振りたてられていたことだろう。その従順さたるやようやくお散歩に連れていってもらえることになった飼い犬のよう——— 総統の宣言どおり、ルーシーはとうとうアンドロイドの犬にまで堕ちたのだ。

『がっつかないの——— さあ、天国に行く時間よ』
ぐちゅっ。

「きゃひっ!」

亀頭が陰唇に埋まる。敏感粘膜へと直に触れる異物の感触は、それまでの比ではない。

ずぶ…：…つ…：ずぶずぶううう——— うつつ!!

「ふああああっ、あっあ、あひやあああああ——— ……!!」

最初小さな抵抗があったものの、耳元で「ぱちん」とゴムの裂ける音がするとグツと膣道が開き、そのまま根元まで一気呵成に刺し貫かれる。

股間から身体を真つ二つに引き裂かれるような衝撃が脳天まで届く。処女喪失の劇感が最後のスイッチを入れ、一も二もなく絶頂へと追い立てられる。

「イクうっ、やっとうっやっとうイクのっ…：ああっイクっイクううう——— ツツ!!」
待ちに待った絶頂の訪れに、少女が歓喜の咆哮を上げる。

子宮から広がる快感の奔流が四肢の隅々まで広がり、重力がなくなつたように身体がフツと軽くなる。挿入絶頂のもたらすあまりの快感に、脳髓が焼ききれ意識は飛んだ。

『あら挿れただけでイッチャつたの？ よつぽど溜まつてたのねエ——でもここからがホントのお楽しみなのよオ？』

ずぶつ、ずぬぶつ、ずぶうううつつ!!

「あひゃっいいいっ!!」

絶頂に気をやりしばし痙攣していたルーシーだったが、胎内の孕んだ衝撃に揺さぶられ意識を引き戻される。総統が腰を使いだし、本格的な抽送を開始したのだ。

「ひんっ、ひんぐううっ……すごっこれすごおっ……おま○こひっかかれてるっ、ちんぽにおま○こひっかきまわされ……ひっイクっ、またイキゆのおおおオツツ!!」

ごつごつとしたイボに膣壁を削られて立て続けに極める。しかも野太い dildo を突き込まれるたび膣壁は引き伸ばされ拡張されて、絶頂最中の敏感粘膜に連続して快感を上塗りされる。

「おなかあつ奥までズンズンきてつきてるううっ……うひっ、そこいいっ！ おねがいそこおつもつと突いてえっ、おま○こ奥んとこズブズブしてえっつ!!」

龟头に子宮口をぶたれるたび腰骨が碎けるほどに揺さぶられてまた果てる。それまで絶頂が叶わなかつたのが嘘のように、あっけないほど連続してオルガスムを迎える、いや迎

えさせられる。

『アンアン喘いじゃってかわいー☆ ほおらルーシーちゃん、オッパイはどうなのオ?』
 総統は機械らしい正確なリズムで肉壺を刺しつつ、両手でぎゅうぎゅうと乳首を振り上げる。

「はああんっ：おっぱいいいいいっ胸でもイクッ、イきますうっ：ひゃわああうっ!! ちくびいつ、ちくびでもイツてるよおおおっ!!」

乳先にも伝播した絶頂に、少女は狂ったよう乱れる。挿入をより深く味わおうと、両脚は無意識のうちに総統の腰に絡みつき、牝尻はくいくいと前後に動いてディルドーを貪っていた。あまりの快感に視界が滲む。

『ルーシーちゃんココも大好きだったわね：ほおら、ぶつといの食べさせてあげる』
 ぎゅにいいっ!!

「んおほおっオシリひっ! オシリはいつてっ、ふとっふとひのおおおっ!!」

剥き身のアナルに警棒を捻じ込まれる。直接腸壁を擦られる燃え上がるような肛悦に、少女はビクンツと鯉のように身を跳ねさせた。

当然それだけで許されるわけもなく、すかさず電源を入れられ直腸に通電させられる。「はきやあああああっイクッオシリイクッ、おなか焼かれながらヒグウウウツツ!!」

子宮と乳先で連続して果てている最中なのに、尻でもまた絶頂させられる。確かに望ん

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>